

30 鼎談書評

日本の「モノづくり」が辿る悲劇的末路

日本経済新聞社編

シャープの崩壊 名門企業を壊したのは誰か

山内 シャープ創業者の故・早川徳次氏が掲げた経営信条は、「誠意と創意」。日本経済新聞社のシャープ担当記者たちが仔細に描くのは、この言葉が虚しく響く名門企業の悲劇的末路です。この本が刊行された後の四月二日にシャープは台湾の鴻



日本経済新聞出版社 1600円＋税

海精密工業に買収されたわけですが、経営者の責任がこれほどまで明瞭な企業崩壊のケースは、日本史でも珍しいように思えます。

直接的に会社を傷付けたのは「液晶パネル」へのモノカルチャー（単一依存）。（1社長、1工場）と揶揄

されたように、四代目の町田勝彦社長が亀山工場を作り、「液晶の次も液晶です」と語る五代目の片山幹雄社長が堺工場を建設する。また、絶えず歴代会長と社長が経営方針で対立し、人事抗争が起こる。内容が人間くさいのですが、あまりにも深刻で「ドタバタ劇」とも呼ばれません。社員の気持ちを思うと、暗澹たる気持ちになりました。

片山 文中ではシャープという企業の崩壊を「絶対権力という魔性にとりつかれて破滅する人間の悲劇」と喩え、冒頭でシェイクスピアの『リチャード三世』の一節が引用されていますが、私はむしろ、『ハムレット』を連想しました。ハムレットのような素敵な人はいないので、内部抗争の末、デンマーク王子フォールティンブラス（鴻海）に国を盗られてしまう。救いのない、悲

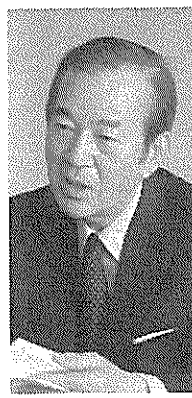
しき滅亡のドラマですね。

阿刀田 楽しい気持ちでは読めない本でした。会社は不思議で、取締役会という社の「総意」を決める場があるにもかかわらず、社長が代われば一変してしまいます。四十代で社長に抜擢された片山氏は液晶の優れた技術者で間違いなく会社の「華」だった。そして社長は「会社の命」。モノづくりの会社として、彼を尊重し、その座に据えるのは当然の営みでしょう。しかし、私は、彼が経営の専門家ではなかったことが悲劇の一因となってしまうようにも思えるのです。「技術と経営のバランス」をどう心得るかが企業に求められていることなのでしょうね。

二匹目のドジョウの「利」

山内 この本の隠れた主人公は、鴻海のトップ「テリー・ゴウ」こと

やまうちまさゆき
山内昌之
（歴史学者・明治大学特任教授）

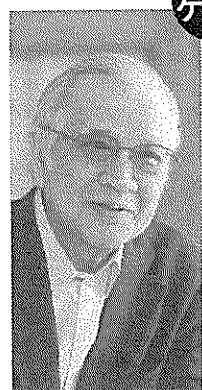


かたやまもりひで
片山杜秀
（政治学者・慶應義塾大学教授）



今月のゲスト

あとうだたかし
阿刀田高
（作家）



郭台銘氏。そして、彼が欲しいのは、シャープの「液晶技術」の一点のみ。三千八百八十八億円の融資という彼からすれば二束三文に近いカネでディスプレイ事業を買い叩く。それ以外の部門を抱えるシャープ本体には関心がないように思えます。本書の内容や、シャープを巡る最近の報道や分析からは、そういう最悪のシナリオが見え隠れします。

片山 これまで日本企業の伝統だった「先端技術開発が主導するビジネスモデル」はもはや成り立たなく

なっているのかもしれませんが。

巨額の開発費を投じて、液晶の解像度は「4K」、「8K」と目まぐるしく進化する。しかし、その技術は、人間の生活上必要なレベルとかげはなれてきていますから、大量消費には結び付き、儲けが限られ、巨額の投資を回収できない。しかも後発国の技術力が高まっているから、すぐ真似される。今後は、「技術開発を繰り返し返して財務的に痩せ細った日本企業が外資に買い叩かれる」というパターンが繰り返されるのかもしれない。

阿刀田「柳の下にいつもドジョウはいない」という諺がありますが、それは嘘。本当は二匹目、三匹目がいるのです。一匹目の栄光、だけを求めるより、二匹目、三匹目を狙ったほうが「利」がある。これを読むと、そういう時代になってしまったのだと実感しますね。

田的人物が現れていたとしても、この構造的問題をどこまで解決させられたか。難しかったでしょう。

阿刀田 本書を書いたのは、「人間大好き」な新聞記者たちなので、非常に人物に寄せた描き方をしています。こうしたジャンルの本には珍しく「主要人物紹介」や「人物相関図」まである。ただ、私は単なる

人間ドラマで良いのか

山内 本書では、自壊を招いたシャープの企業体質を明示する悪しきエピソードが紹介されています。

二〇一〇年、堺工場では、東芝やソニーなど自社以外に供給する液晶パネルも製造していた。ところが、（需給が逼迫するなかでシャープは自社製テレビへの供給を優先し、外販に回すパネルの量を制限した。（略）決定を下したのは片山だった）というのです。（取引先よりも社内の都合を優先する傾向があった）シャープに、当然、顧客は激怒したといえます。これは一番やってはいけないことでしょう。自分を犠牲にしても顧客を大切に。商売の基本を忘れた企業は必ず淘汰される運命にあるのかもしれない。

阿刀田 成功した経営者は、仮に

すごい技術があっても、成し遂げてきたことが如何に偉大だとしても、必ず、謙虚さを持っています。

山内 ソニーを作った井深大氏、盛田昭夫氏は創業時に「真面目ナル技術者ノ技能ヲ、最高度ニ發揮セシムベキ自由闊達ニシテ愉快ナル理想工場ノ建設」という「モノを作る喜び」がしみ出てくるような言葉を掲げました。シャープは自社の技術に驕るあまり、どこかの時点でモノづくりの原点を忘れてしまったのかもしれないですね。

片山 シャープは企業ガバナンスが杜撰すぎたのでここまで過激に崩壊してしまいましたが、一方で、業界全体が抱える構造的問題が事態を悪化させた側面も否めません。東芝やソニー、パナソニックだって、同様の問題に直面して、多かれ少なかれ苦しんでいるわけです。

仮にシャープの経営陣に井深・盛

「ギーン・マジック」で描く天才歌人の生涯

ドナルド・キーン 角地幸男訳

石川啄木

阿刀田 日本文学は控えめに見ても、ノーベル文学賞受賞者が二十人いても良いくらい優れています。しかし、日本語という特殊言語ゆえ世界ではあまり理解されていないのが現状です。そんな中ドナルド・キーンさんのような世界に影響力のある

「人間ドラマ」にしてしまったら、一番大事なところを見損なう可能性があるあるとも感じました。「こいつとこいつが悪いやつなんだ」と列挙していくだけでは、経営的構造、地域の実態、技術革新など「コトの本質」から離れていってしまう。そのあたりも踏まえ、全体を俯瞰した分析があったら、なお良かったでしょう。



新潮社
2200円＋税

日本文学者が、おそらく日本で最も人気のある歌人・石川啄木の生涯を紹介することは、我々にとって大いなる喜びではないでしょうか。

鼎談書評

啄木の短歌は、文語的表現で書かれながら、内容は極めて現代的。人生の一秒一瞬を、一つの心理で捉えることができるという点で、啄木は生まれながらにして言葉の天才でした。盛岡尋常中学を中退し、貧乏と借金、流浪の生活を繰り返しながら創作し続ける――一人の天才が、大変に強い自我を持って生きたことが本書からはよく分かります。

片山 確かに天才ですね。歌壇的に言うと啄木はいちおう『明星』ですが、与謝野鉄幹・晶子みたいに理想や情念に傾くのではなく、正岡子規の信奉者たちの「アララギ派」のように写生に徹するのでもない。（ふるさとの訛なつかし 停車場の人ごみの中に そを聴きにゆく）なんて情念と写生とアクションの三位一体です。天才的に「変な短歌」であり、戦後の鬼才、寺山修司の短歌も啄木を超えていないように思えます。

山内 啄木を構成する大きなフアクターは「北海道」。この本でも北海道での生活は事細かに描かれます。

私はまさに札幌生まれ小樽育ちですから、幼少期から、非常に近しく感じていたのです。例えば、歌集『一握の砂』に収められている（かなしきは小樽の町よ 歌ふことなき人人の 声の荒さよ」という短歌。友人たちと「俺たち、言葉が荒いんだな」と言っていて笑った記憶もある（笑）。一方、札幌は（秋風の郷なり、しめやかなる恋の多くありさうなる都）。啄木は自分が歩いた街を本当に良く見ている。その観察眼には地元人としても感心させられますね。

とんでもない破綻人間

阿刀田 啄木の創作的関心は、ある時点を境に和歌から小説へと移ります。その理由について啄木も色々

と述べていますが、簡潔に言えば、

「小説を書いた方が儲かる」の一点でしょう。啄木の小説は、処女作『雲は天才である』が一番有名ですが、読んでみると、ハッキリ申し上げて、新人賞も取れないという程度の作品です（笑）。残念ながら、言葉の天才とはいえども、小説家としては成功しなかった。一つのモチーフを鮮明にしてストーリーを書いていく小説の世界に行くには、二十歳で夭逝した啄木は若すぎたのです。世の中や人間のことを知らない小説は書けませんからね。

片山 そこでキーンさんの注目するのが啄木の日記ですね。キーンさんは日本の古代以来の日記文学の伝統の中に啄木を大きく位置づける。啄木が日々の生活を綴った『ローマ字日記』こそ、啄木の最高傑作だと言うのです。啄木がローマ字で書いたのは、もしも妻の目に触れても読

みにくくするため。つまり人に知られたくない秘密を書く。そこにこそいちばんの真実が込められ、真実は傑作を生む。人に読ませないつもりのものが最高傑作。なるほど。これはもうキーン・マジックですよ。

山内 『ローマ字日記』を読むと、金もないのによく吞むわ、廊通いはするわで本当に凄。情を交わした釧路の芸者「小奴」に食わせてもらい、拳句の果てには東京に出てまで送金して貰う。いわば「たかり」や「ヒモ」の類ですよ。啄木は、はみ出しの世界を闊歩する一種の破綻人間ですが、いつも誰かが支えている。その才能も含め、周りに「放っておけない男だね」と思わせる人間的魅力があったのでしよう。不倫どころか乱倫かもしれない。今の世の中だったら有名になった途端にバッシングされていますよ（笑）。

阿刀田 啄木の貧乏は相当なも

の。周囲の人間で借金されなかった人は誰もいなかったようですね。

山内 感心したのは旧制盛岡中学校時代からの友人・金田一京助です。金田一は啄木から金銭から何から厄介をかけられた挙げ句、へ自分の人生を妨げる「束縛」だと敵意を向けられたり、一番大事な自らの研究まで「一体アイヌ語をやって何になるんです」と貶される。しかし、最期まで寄りそう。金田一は教育者、学者の鑑のような人格者ですね。

片山 啄木は日本人に親しまれている一方、近年は論じられる機会が減っていたように思います。理由のひとつは実は「冷戦構造の崩壊」。一九八〇年代までは啄木を社会主義に引き寄せ、北一輝や幸徳秋水らと絡めて、「天皇制国家の矛盾を感じ取った思想家」として論じることが多かった。ところが、ソ連崩壊に伴い社会主義への注目度が下がり、そ

ういう啄木論は色褪せてしまった。

そこでどうするか。キーンさんは日記に着眼して「土佐日記」以来の伝統の中で啄木に新しい椅子を与えた。素晴らしいお仕事です。

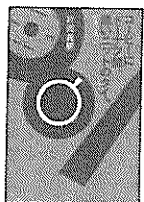
阿刀田 キーンさんは本書の最後をこう結んでいます。へ地下鉄の中でゲームの数々にふける退屈で無意

美しく格好良い、懐かしき都会小説

片岡義男

コーヒーにドーナツ盤、黒いニットのタイ。

1960-1973



光文社
2000円+税

片山 テディ片岡、こと片岡義男さんは息の長い作家です。一九七〇年代から八〇年代にかけては、『スローなブギにしてくれ』や『彼のオートバイ、彼女の島』などの作品

味な行為は、いつしか偉大な音楽の豊かさや啄木の詩歌の人間性へと人々を駆り立てるようになるだろう。貧乏しながら惨憺たる生活を送り、周囲に迷惑をかけながら生きた歌人の人生を通じ、日本語の深さや素晴らしさを改めて省みよう。そう思わせる一冊ですね。

で都会的な若者文化を担いました。

本書は片岡さんが学生、サラリーマン、フリーライターだった六〇年〜七三年という期間、ご自身の青春時代を描いた自伝的な連作小説と言えるでしょう。しかも音楽小説。一篇一篇がそのとき鳴った音楽と結び付いている。また、東京人である片岡

鼎談書評

さんによる「都会小説」の側面も強い。例えば、小田急線に乗って下北沢に帰る「僕」と西武新宿線の中井に住む「彼女」。当時の東京の「階層的秩序」などが猛烈に伝わります。

阿刀田 私には今年五十歳を迎える息子がいますが、実は片岡さんの大ファン。片岡さんならではの独特のシチュエーションが生む美意識に心酔している。本書でもそのスタイルをとことん貫いておられますね。

私は、片岡さんより五歳ほど年上なのですが、同じ早稲田大学の出身者として、彼が行ったであろう雀荘や珈琲屋はほとんど見当が付くほど時代を共有しているんです。本書には「あの時代はそうだったなあ」と頷けることやモノがちゃんとピックアップされている。そういう点でも非常に楽しめる一冊です。

山内 片岡さんは一九四〇年のお生まれですから、私よりも七つ年

の末尾に作中に登場した音楽のEPやLPの当時のレコードジャケットがカラー写真でたくさん載っている。レコードファンには堪りませぬ。小説とジャケット写真集を兼ねている。文化史、風俗史の資料本という性格もある。しかもマニアックな珍盤も多い。例えば「筒井広志ラテン・アメリカノ」の「永遠のラテン」。筒井広志さんは『風雲ライオン丸』や『魔法使いチャッピー』などテレビの子供向け番組の作曲家として活躍した方ですが、ラテン音楽アルバムを作っていたとは知りませんでした。欲しくなってしまう。

山内 私の中でも音楽が鳴るレコードはたくさんありますね。例えば、ニーノ・ロータの『太陽がいっぱい』。このレコードのB面は、映画『撃墜王アフリカの星』の主題歌『アフリカの星のボレロ』。ヨアヒム・ハンセン扮するドイツ空軍のパ

上。自己史を重ねるという意味でも、私は非常に興味深く読みました。ただし、創作としても疑問なのは、「果たしてこんなにカッコイイ早稲田の学生が当時本当にいたのだろうか？」ということ(笑)。シボレーで現れたとか、メカニカル鉛筆で原稿を書いたとか、コーヒートの傍にはいつも美人がいるとか……。どうも、早稲田というよりも慶応じゃあないか、と(笑)。やや偏見かもしれないが、当時の早稲田といったら、縄のれんや『三朝庵』などの蕎麦屋のイメージですが、そういう庶民的な店は出てこないんです。

阿刀田 自分の経験と照らし合わせてみても、早稲田の学生がこんなにいることにはないと思いますよ(笑)。仮に私がこの時代を書いたら、巷によくある「貧乏していた」という話しか書けません。こんなに美しく、色々な音楽が流れて……と

イロットがエジプト上空で戦死するという格好良い映画だったなあと言を回想してしまいました。その他にも『ムーン・リバー』、『コーヒールンバ』、『峠の幌馬車』、『夏の日』、『恋』……。昭和三〇年代、四〇年代の風景が浮かび上がるモノがちりばめられていて実に楽しい。

阿刀田 モノと言えば、一九六一年の章で、「僕」が、麴町にオフィスを構える貿易会社で、スミス・コロナ製のタイプライターを買うシーンがあるでしょう。あの頃、個人でタイプライターを買うなんて、とても出来ない。やはり珍しかったテープレコーダーとほぼ同じ値段でした。私が所属していた大学のフランス文学研究会で「どちらを買うか」となって、結局三万円で苦労して手

いうものではなかったなあ。基本的に早稲田のイメージは「窓の外には神田川」なんですよ。

片山 六八年や六九年は都市騒乱時代ですが、「学生闘争的な要素」も一切出てきません。

山内 印象的なのは、六七年度の一章。おそらく新宿の京王プラザと思しきホテルのプールサイドですが、「僕」がジンジャエールを飲んでいて、(ホテルの人は電話機を僕のテーブルへ持って来た)、そして、ホテルの人が飲み物の代金については、「さきほどのお電話のかたから頂戴することになっております」と言う。あまりに格好良すぎますが、ぴたっと決まっている(笑)。

レコードコレクションに驚嘆

片山 本書の特徴はヴィジュアル本でもあるということ。連作の各篇

に入れました。しかし、「僕」は女性にかなり安く譲ってもらえる。

山内 私が中高生の頃、母はブラザーのタイプライターを買ってくれました。この有難い思い出を蘇らせてくれたことを本当に片岡さんに感謝したい。母は当時家で、ブラザー編み機で縫物をしていたので、何かの機会に月賦で買ってくれたのです。同じものを買っても、やはり手に入れ方が格好良い。私とは大違いですよ(笑)。

片山 それこそ、片岡さんが「片岡義男」たる所以ですね。

阿刀田 今、私が館長を務める山梨県立図書館では、「親しい人に本を贈ろう」という運動をやっているんです。ぜひ、六〇、七〇年代の都会を知っているお父さんには、この本を買って贈ってもらいたい。誰しも共感できる懐かしさが見つかる本ですから。

鼎談書評